

第一次大戦時の似島俘虜収容所

瀬戸 武彦（高知大学名誉教授）

第一次大戦時にドイツ兵俘虜を収容した似島俘虜収容所は、広島港から南西に約八キロの広島湾に浮かぶ似島にあった。似島は周囲約十四キロの小さな島で、標高二七八メートルの安芸小富士（あきのこふじ）と呼ばれる、富士山に似た山があることから平地面積は少ない（図1参照）。島の西側の家下（やしした）地区には古くから島民が住んでいたが、東側の平地はごく僅かである。今日は社会福祉法人の似島学園、似島臨海少年自然の家と平和養老館、そして似島小中学校のある三ヶ所ほどである。第一次大戦時にドイツ兵俘虜収容所があった場所には、現在似島臨海少年自然の家と平和養老館が設けられている。

似島俘虜収容所は、大阪俘虜収容所の閉鎖にともなって五四八名⁽¹⁾の俘虜を大阪から移送して、大正六（一九一七）年二月十九日から大正九（一九二〇）年四月一日までの約三年間開設された。所長には大阪俘虜収容所長の菅沼来中佐が引き続いて就任し、収容所の閉鎖までその任にあった。収容所の敷地の総面積は約四八五〇坪（約一六〇〇〇平米）だった。敷地には二面のテニスコートと運動場が設けられ、また四棟の兵卒用バラック、准士官・下士官用、将校用各一棟があり、その他



図1 似島遠景

管理棟、診療所、厨房、パン工場、酒保、浴場、洗面所があった（図2参照）。

似島に収容所が設置されることになった遠因は日清戦争に発する。中国大陸や朝鮮半島からの帰還兵が持ち込む病原菌を防ぐために明治二八（一九九五）年六月、似島に臨時陸軍免疫所（後に名称は検査所となる）が、今日は似島学園のある場所に設置された。更に日露戦争時代には陸軍第二検査所が

設置された。日露戦争は日清戦争とは比較にならないほどの傷病兵が出現した。またロシア兵俘虜も約八万人に及び、第一検査所は臨時的な俘虜収容所に当てられた。大陸から引き揚げてきた兵士は、新たに設置された第二検査所で消毒を受けて、それから宇品港に上陸したのである。その第二検査所が後にドイツ兵俘虜収容所になった。似島検査所は日清戦争、日露戦争、北清事変（義和団の乱）、第一次大戦、シベリア出兵、山東出兵、満州事変から日中戦争、太平洋戦争と、実は近代日本の全ての戦争にかかわった場所であった。それは軍都広島を擁する広島湾にあったことが大きく関係している。日清戦争時には広島城跡に大本営が置かれたが、更に似島のすぐ近くには海軍兵学校を擁する江田島があり、また呉の軍港も遠くはなかった。

日独戦争は一ヶ月半で終わったが、その結果、四七〇〇名近いドイツ人将兵（オーストリア将兵を含む）が日本各地十二ヶ所の収容所に収容された。しかし、欧州では戦争が一向に終わる気配がなかった。そこで各地に分散していた収容所を整理、統合することになり、習志野、名古屋、青野原、似島、板東、久留米の六ヶ所に集約された。似島俘虜収容所が他の収容所と異なる最も大きな点は、島に設けられた収容所だったことである。似島俘虜収容所は整理統合後の六収容所の中で最も情報量が少なく、実態が余り分かっていないのはそこに起因すると

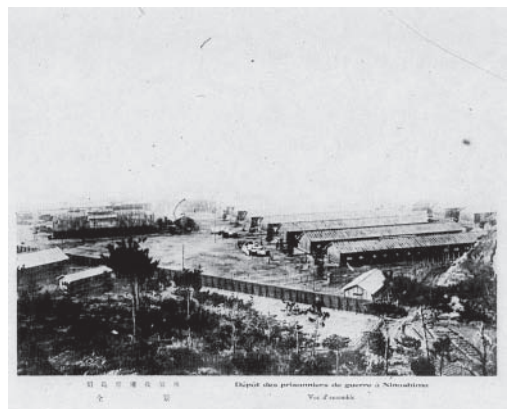


図2 似島俘虜収容所全景『大正三四年戦役俘虜写真真帖』（国立国会図書館所蔵）

も言える。先に触れたように周辺部には海軍の要衝地が多かったことから、板塀で海への視界が遮られていた。それにも拘わらず脱走事件が起こったために、収容所内の規律、統制は厳しかったと思われる。

整理統合後の各地の収容所では、やがて各種の展覧会や音楽会、スポーツ大会が開かれた。似島収容所での各種行事等について記してみる。^②

【講習会】

収容俘虜の七三パーセントが何らかの講習会に参加した。四六名の講師陣による四七のコースが設けられ、各コースには平均三〇名から五〇名の受講者があったと言われる。講習会の種類は、ドイツ語、日本語、英語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、数学、機械工学、建設工学、電気学、経済学、法学、歴史、タイプライター等である。

【演劇活動】

大阪収容所時代から始まり、夏季には野外公演を六回、収容所内に設備ができると一緒に活発化して、上演作品は二〇本以上に達した。チェーホフの『熊』やルートヴィヒ・トーマの『二等車』などが上演された。バイエルン方言を用いたトーマの作品は各地の収容所で上演されている。当時は人気があったものと思われる。

【新聞の発行】

大阪収容所時代の大正五（一九一六）年六月から発行されたものを引き継いで、日刊紙「似島収容所新聞」(Zeitung des Lagers Ninoshima) が発行されたが、残念ながら今日その詳細は分かっていない。「似島独逸俘虜技術工芸品展覧会目録」(図3参照)の記すところによ



図3 『似島独逸俘虜技術工芸品展覧会目録』の表紙

れば、当初は主として日本の新聞記事をドイツ語に訳したものが多かったが、後に収容所内の出来事を記す記事も掲載された。

【俘虜技術工芸品展覧会】

大正八（一九一九）年三月四日から十三日まで広島県物産陳列館^③ 今日「原爆ドーム」と呼ばれている建物で上記展覧会が開催された。「似島独逸俘虜技術工芸品展覧会目録」には、俘虜たちによる出品作品が記されている。出品内容は、写真、油絵、水彩画、ペン画、額縁、チェス盤、軍艦や漁船の模型、似島収容所の模型、火鉢、靴、蒸気機関車や蒸気船の模型、蹄鉄、大砲、文鎮、昆虫の標本、鳥籠、鋳物、岩石の標本、スリッパ、幾何学のノート、家の設計図、マツチ棒によるヴァイオリン・チェロ、各種革製品、各種編み物、薬品の調査剤、鉄筋コンクリート構造物、晴雨自動計測器など多岐にわたる。展覧会の様子は新聞で連日に亘って詳細に報道され、九日間での入場者は一六万三四七人だった。因みに大正九（一九二〇）年当時の広島市の人口は約三〇万人だった。なお、会場には食堂も設置され、またハム、ソーセイジ類の販売や、バウムクーヘンの実演販売も行われ、出品作品の即売会もあった。

【芸術活動】

大正八（一九一九）年五月十八日には、広島高等師範学校講堂で俘虜に



図5 上記『目録』中のヘルマン・ヴォルシュケの広告

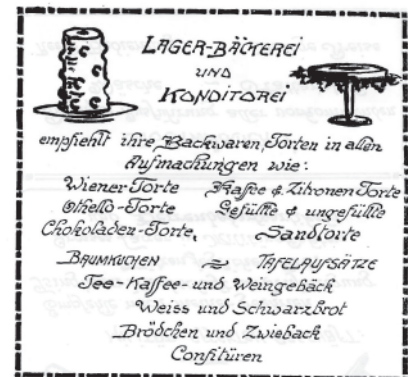


図4 上記『目録』中のバウムクーヘンの広告

よる音楽会が開催された。当初は四月二七日行われる筈が、事情で延期されたのであった。四月二三日付の『中国新聞』の予告記事によると、演奏曲目としてはモーツアルトの歌劇『魔笛』序曲も見られるが、「ローレライ」や「菩提樹」等のポピュラーなものを中心だった。

整理統合後の久留米、名古屋、板東の各収容所でも解放間際には収容所の外での演奏会が開催されたが、似島俘虜収容所の場合のように、一般聴衆も自由に入場が許された音楽会は極めて珍しかった。しかも『中国新聞』紙上で三日間に亘って、演奏内容が詳細に報じられたことは他の収容所では見られなかった事例である。なお図6は、その演奏会前後に高等師範学校玄関脇で撮影された演奏者等の集合写真である。

【スポーツ活動】

収容所内では日常的に、サッカーやテニス等の各種スポーツが行われていたが、ここでは特に注目に値するサッカーの対外試合について触れてみる。

大正八（一九一九）年一月二六日、開校まもない広島高等師範学校の運動場で、似島のドイツ兵俘虜と広島高等師範学校、県師範学校、附属中、一中とのサッカー交歓試合が行われた。二試合行った結果は、五対〇、六対〇で、俘虜チームの圧勝であった。図7はその折に撮影された日独両チームの記念写真である。

平成十八（二〇〇六）年一月二二日、テレビ新広島制作の「歴史発掘スペシャル ドイツからの贈りもの―奇跡の絆の物語」が、フジテレビ系列



図6 広島高等師範学校演奏会での記念写真
(三浦精子氏所蔵)

によって全国ネットで放映されたが、番組の中では似島の俘虜サッカーチームが大きく取り上げられた。

【俘虜による労役】

労役は各収容所で行われていたが、似島での労役については現地調査に当たったスイス人医師の次の証言が残されている。「似島収容所での捕虜らの主たる不満は、いわゆる「ロウエキ(労役)」に在ります。(中略) 毎日交代する労働分遣隊を組んだ捕虜らは、日当四

銭で土砂を手押し車に乗せ、広島市内各地に運んでいきます。他の収容所では「ロウエキ」は通常きつい苦力労働ではなく、捕虜らからは、むしろ恰好の気分転換として歓迎さえされています。⁽⁴⁾ この土砂運搬作業は広島西練兵場修繕と第五師団長官舎の敷地整備であったと思われる。⁽⁵⁾

なお、収容所の近くに一時期製針工場があって、俘虜による労役が行われた。しかしその工場はほどなく閉鎖されてしまった。『中国新聞』(大正七(一九一八)年二月七日付)は「俘虜備役失敗 似島工場閉鎖」と題して次のように報じた。「広島製針組合に於て斯業の進歩を爲る為め似島に伝習工場を設け(中略) 俘虜二名中一名は全然製針を解せず他の一名も機械職工にして僅かに製針の一部を知れるに止まり(後略)」。解放間際には広島市内の各種製造所で、労役というよりは日本人技術者への指導が行われたことは、後述するヴォルシユケの項で記す通りである。

【遠足】

似島には安芸の小富士という絶好の景勝地があったが、俘虜の遠足等は行われなかった。その理由は既に触れたように、海軍の要衝地が近くあったからと考えられる。しかし解放間近になった大正八(一九一九)年十一



図7 サッカー交歓試合での日独両チームの記念写真
『母校創立百年記念史』(社団法人東雲同窓会)

月に、宮島の厳島神社への遠足が行われた。

俘虜收容所の研究は往々にして、個々の俘虜の活動よりも管理・運営など、收容所全体について言及することが多い。しかし、俘虜たちが收容前にどのような生活を送っていたのか、收容中はどんな活動をしたのか、更に解放後の人生はどうであったのかということは、日独文化交流史上の視点からすると、場合によっては收容所の全体像を記すことよりも、ずっと重要なことと思われる。そこで最後に似島收容所俘虜の内から、後に日本と関わりをもった、特色に富むと思われる五名の俘虜を簡単に紹介して、この稿を閉じることにする。なお、俘虜の所属・階級は收容時点のものである。

(一) アドルフ・ヴァルデマール・アーペル (Adolf Waldemar Apel・一八九〇～?)：海軍第二工機団第二中隊・予備一等焚火兵。広島高等師範学校の運動場でのサッカー交流試合に出場したと思われる。当時附属中の生徒でサッカーに出場した茂森薫の次の証言が残されている。「アッペルという常駐通訳官が居た。(中略)或る日彼の素性を聞いたところ、横浜で生まれ、三〇年前(大正三(一九一四)年)の第一次欧州大戦のとき召集され、青島で日本軍と戦ったが俘虜となり、広島島の似島に收容されたという。そして曰く、当時最も楽しかったことはコウシ「高師」のグラウンドでやる蹴球だったという。」⁶⁾ 大正八(一九一九)年十月八日から、労役で広島電気製作所に通った。労役時間は午前九時から午後三時三〇分迄で、賃金は日給一円五〇銭だった。大戦終結して解放後は、労役先の広島電気製作所に雇用された。

(二) カール・ユーハイム (Karl Juchheim・一八八九～一九四五)：国民軍・卒。明治四一(一九〇八)年、菓子職人として青島で菓子店と喫茶店を営むドイツ人に雇われて青島に赴いた。バウムクーヘンを得意とし、菓子職マイスターの資格を得ると自身の菓子店を営んだ。日本がドイツに宣戦を布告した大正三(一九一四)年八月二三日の約一ヶ月前にエリーゼと結婚した。日独戦争が終結して十ヶ月ほど経った大正四(一九一五)年

九月二〇日、国民軍所属として軍籍があるとの判断を下されて、大阪俘虜收容所に收容された。その一ヶ月半後の十一月四日に息子カール・フランツが生まれた。妻と息子は、大戦終結してユーハイムが解放されるまで青島で暮らした。俘虜技術工芸品展覧会では、オトマーやヴォルシュケの励ましを受けてバウムクーヘンを製造・販売した(図4参照)。大戦終結して解放後は、明治屋の菓子職人として月給三五〇円⁷⁾という破格の俸給で迎えられた。やがてユーハイムは独立して横浜市山下町に菓子店ユーハイムを開業したが、大正十二(一九二三)年九月一日に起きた関東大震災で店は倒壊した。その後神戸市三宮に移って再出発した。一人息子のカール・フランツも菓子職人となったが、第二次大戦に応召して昭和二〇(一九四五)年五月六日ウイン郊外で戦死した。昭和二〇(一九四五)年六月五日の神戸空襲で店は瓦解し、ユーハイムは失意の内に八月十四日六甲ホテルで死去した。戦後店は再建され、妻エリーゼの奮闘によって発展し、現在もドイツ菓子の老舗として広く知られている。なお、平成二二(二〇一〇)年一月十三日、NHK総合テレビの番組『歴史秘話ヒストリア』で、「焼け跡とバウムクーヘン」あるドイツ人夫妻の苦難と愛」と題してカール・ユーハイムが採りあげられた。

(三) ハンス・クロパチェク (Hans W. Kropatschek・一八七八～一九三五)：海軍東アジア分遣隊参謀本部・陸軍少尉。父は帝国議会議員で、母はロシア人であった。十九歳でロストックの歩兵第九〇連隊附少尉になった。北清事変(義和団の乱)の際にはドイツ派遣軍の一員となり、福島安正大佐⁸⁾(当時)の指揮下で大沽要塞の監視任務に就いた。その後ドイツ参謀本部附となり、明治三八(一九〇五)年にペツェル少将の長女マルガレーテと結婚した。ペツェル少将が清国駐屯軍司令官神尾光臣少将⁹⁾(当時)と知己だったことから、神尾少将から結婚祝いには仙台筆筒を贈られた。結婚を機に軍隊生活を離れて、青島のハンブルク汽船会社で従事することになったが、その傍らロシア副領事館の副領事を務めた。大正三(一九一四)年八月三日に総督府から動員令が発せられると、副領事の職を放棄して青島ドイツ軍に参加した。妻は娘と息子の三人で大戦終結まで青島に留まった。大戦終結して解放後の大正九(一九二〇)年三月、妻

子を日本に呼び寄せて横浜や神戸に住んだ。大正十一（一九二二）年にドイツへ帰国した。

(四) ハインリヒ・フリードリヒ・ヴィルヘルム・オトマー (Heinrich Friedrich Wilhelm Ohmer: 一八八二～一九三四) 海軍第三大隊予備榴弾砲兵隊・予備陸軍少尉。明治三七（一九〇四）年に学位を取得して、明治四〇（一九〇七）年末北京に赴き、明治四二（一九〇九）年青島の徳華高等学堂教授に就任した。明治四四（一九一一）年に結婚して二人の息子をもうけた。第一次大戦の勃発とともに予備陸軍少尉として応召し、青島の陥落によって大阪俘虜収容所に送られた。オトマーは収容されるやただちに専門とする中国語の研究を続行するとともに、学習の手本を示すべく日本語の勉強に打ちこんだ。小学校の国語読本から初めて、平仮名・片仮名を覚え、最後には『万葉集』の読解にまで及んだ。このことは多くの俘虜達に刺激を与え、次々に講習会が開催されるようになった。大戦終結して解放後は松山高専学校教師として招聘されることになった。『中国新聞』（大正九（一九二〇）年一月二〇日付）には次の記述がある。「解放された似島の俘虜婦心矢の如き思ひを西京丸に乗せて解放された八三名、一行中のオートメル氏は松山高専講師に内定（中略）、尚オートメル（マ）教授は一旦青島に往き家族を纏めて本年三月末迄に赴任する筈である」。家族を日本へ迎えるために青島に戻つてみると、妻エリーザベトは重い病にあり、看護のために松山での職を辞退した。妻は大正九（一九二〇）年八月六日に死去した。オトマーはその後昭和八（一九三三）年まで上海の同済大学教授となつたが、やがて病に罹つてドイツに帰国した。

(五) ヘルマン・ヴォルシュケ (Hermann Wolschke: 一八九三～一九六三); 海軍膠州砲兵大隊第二中隊・二等砲兵。応召前は食肉加工職マイスターだった。似島時代、食肉加工職人だったケルン及びシュトルの三人で、当時の広島市広瀬町上水入町のハム製造会社酒井商会でハム製造の技術指導をした。解放間際の三人の写真が『中国新聞』（大正八（一九一九）年十二月二五日付）に大きく掲載された。なお、広島県物産陳列館での

俘虜作品展示即売会には、baumクーヘンを出品するようユーハイムを励まし、自身はソーセージを出品した（図5参照）。大戦終結後は、銀座に新規開店した明治屋経営の「カフェー・ユーロップ」のソーセイジ製造主任になった。昭和の初め、銀座に屋台を出して日本で初めてホットドッグを販売した。昭和九（一九三四）年、アメリカからベブルースを含むプロ野球チームが来日した折には、甲子園球場でホットドッグを販売したといわれる。第二次大戦中は同盟国の人間ではあったが、長野県野尻湖畔でいわば幽閉生活を送った。後に軽井沢に自分の店「ヘルマン」を創業した。昭和三八（一九六三）年に没し、東京都狛江市の泉龍寺に埋葬された。墓碑には「遙かなる祖国ドイツを誇り、第二の故郷日本を愛したヘルマン・ヴォルシュケここに眠る」の銘が刻まれている。今日、息子のヘルマン・ヴォルシュケ氏（父親と同名）が神奈川県厚木市で「ヘルマン」を営業している。

付記 本稿執筆に際しては、広島市公文書館から関連資料の提供を受けた。記して感謝申し上げます。

註

- (1) 『独逸及奥洪国俘虜名簿』（日本帝国俘虜情報局、大正六（一九一七）年六月改訂）による俘虜の総数は四七一五名であるが、日本への送還前に青島で死亡した俘虜もいた。日本の収容所に収容された俘虜は四六九七名であった。
- (2) 宮崎佳都夫執筆『似島の口伝と史実』（似島連合町内会郷土史編纂委員会、平成十（一九九八）年十二月）を参考にした。
- (3) 広島県物産陳列館は大正四（一九一五）年八月五日に開館した。設計者のチェコ人ヤン・レッツェル (Jan Letzel, 一八八〇～一九二五) は、明治四〇（一九〇七）年に東京で建築事務所を経営していたドイツ人テ・ランデ (Georg de Lalande, 一八七二～一九一四; 朝鮮総督府庁舎や神戸・北野の「風見鶏の家」の設計者) の招きで来日し、明治四二（一九〇九）年に東京・京橋に自身の設計事務所を開設した。広島県物産陳列館は大正十一（一九二二）年に広島県商品陳列所と改称され、さらに昭和八（一九三三）年には広島県産業奨励館と改称された。なお、広島県物産陳列館に関しては『広島から広島―ドームが見つめ続けた街展』（広島県立美術館、

- 平成二二(二〇一〇)年八月)を、またヤン・レットについて、菊楽志「ヤン・レット再考―書簡集から建築活動をたどる」(『広島市公文書館紀要』第二五号、二〇一二年)を参照されたい。
- (4) 大川四郎編訳『欧米人捕虜と赤十字活動 パラヴィチーニ博士の復権』二〇五、二〇六頁、論創社、二〇〇六年。
- (5) 『欧受大日記』(大正八(一九一九)年十月、防衛省防衛研究所図書館所蔵)。を参照されたい。
- (6) 『広島大学附属中・高等学校創立八十年史 上巻』二八一頁、昭和六〇(一九八五)年。なお、中野光夫「ドイツ軍捕虜によるサッカーの指導」(広島美奈美国風土記、No.1、平成三三(二〇二一)年三月)を参照されたい。
- (7) 俘虜の中で最高月俸は元総督のマイヤー・ヴァルデック海軍大佐の二八〇円だった。陸軍中佐一八三円、陸軍大尉五〇円、陸軍少尉四〇円、下士以下は日給三〇銭だった。二等兵扱いであったユーハイムの場合は、月給換算で九円ほどであった。当時の二〇〇円は今日の約一六〇万円(約八〇〇〇倍)に相当する。なお、当時の為替レートで一円は約二マルク、一ドルは約二円、一ポンドは約十円であった。
- (8) 福島安正(一八五二―一九一九)は陸軍きつての情報将校で、中尉から少将までの三〇年間を情報関係一筋で通した。明治二〇年陸軍少佐の時駐在武官としてベルリンに赴任、帰国の際にシベリアを単騎横断して勇名を馳せた。北清事変では大沽城塞攻撃の混成大隊司令官を務めた。明治四〇年男爵となり、大正二年陸軍大将になった。大正三(一九一四)年八月一日、青島にマイヤー・ヴァルデック膠州総督を訪問した。
- (9) 神尾光臣(一八五五―一九二七)は陸軍内で三木指に入る中国通と言われた。日独戦争時は陸軍中将で、青島攻囲軍司令官となる。大正三(一九一四)年十二月十八日青島から東京駅に凱旋した。その日はちょうど東京駅開業式の日であった。大正四(一九一五)年六月二十四日大将に昇任し、七月十四日男爵に叙せられた。なお、次女安子は明治四二(一九〇九)年三月に小説家の有島武郎に嫁ぎ息子三人をもうけた。



図8 似島独逸俘虜技術工芸品展覧會 絵葉書(表面)
(広島市文化振興課所蔵)



図9 上記絵葉書(裏面)